

# サン・ヴィート・ヴェッキオ教会に描かれた 『パントクラートル』の特異性

—南イタリアの洞窟教会壁画の図像プログラムと建築空間の関係—

## The Peculiarity of the Christ Pantokrator Painted San Vito Vecchio Church

—The Relationship between the Configuration of Icon in Mural Paintings

in Cave Churches in South Italy and Architectural Space—

川窪 洸太

Kota, KAWAKUBO

### 要旨:

2011年9月に行われた南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクトに参加し、その時の調査地であったサン・ヴィート・ヴェッキオ教会後陣に描かれた『パントクラートルのキリスト』に強い印象を受けた。「パントクラートル」とは図像学的に定義すると、「黙示録に典拠をもつキリストの尊称であり、図像表現としては、肩にかかる長髪を中央で分けた有髭のキリストの正面半身像であり、左手で福音書を持ち、胸の前または右肩のところで右手で祝福する姿で描かれる。」一般的に威厳に満ち、全能者として表現されるパントクラートルであるが、私が目にしたサン・ヴィート・ヴェッキオ教会に描かれたパントクラートルからは、威厳や神の恐ろしさと言うよりも、むしろ対極にある親しみやすさを強く感じたのである。いったいなぜこのような印象を受けたのか、単に主観的なものなのか、それとも何か理由のあるものなのかを明らかにするために、卒業論文において考察を試みた。

キーワード: 南イタリア, 洞窟教会, パントクラートル, 建築空間, 図像プログラム

### Abstract:

I took part in the survey in September 2011 and interested in the Christ Pantokrator painted an apse of the Church San Vito Vecchio. Christ Pantokrator is iconographical defined as “Honorific title of Christ on the authority of the Apocalypse. For pictorial expression, it is a half front figure and has a long hair parted in the middle and a beard. He has the Bible on his left hand and bless by the right hand.” Generally, Pantokrator is painted a man of great dignity. But I feel rather friendship than dignity from the pantokrator painted the church San Vito Vecchio. Accordingly, I try to make clear the reason why I feel friendship from that painting.

Keywords: south Italy, Cave Churches, Christ Pantokrator, Architectural space, Configuration of Icon

### 1. はじめに

南イタリアには、現在でも多くの洞窟教会が点在している。それらは8~9世紀以降、シチリア島や、はたまた東ローマ帝国からイコノクラスムを逃れて渡来したギリシア正教の修道士たちが渡来し、各地の凝灰岩台地や深い峡谷に定住するようになった。その結果、彼らはカッパドキアにも似た凝灰岩台地に洞窟を掘り、様々な教会や修道院を造り、その堂内を旧約・新約聖書の場面や諸聖人で彩ったのである。こうした洞窟教会は現在の市街地から遠く離れ、現地に住む人々でさえも簡単には行く事が出来ない地域に広がっている。さらに、1960年代に一定の学術調査が行われたものの、それ以降は本格的な調査研究は行われておらず、多くの洞窟教会や壁画は劣悪な環境の下で、保存修復の対象として光が当たることのないまま消滅の時を待っている状態にある。しか

し、南イタリアは東方からのギリシア正教と西方からのベネディクト会によるローマ・カトリックが混交し、イタロ・ビザンティン様式の美術を展開した歴史的、美術的に重要なところであり、その様な貴重な文化遺産は早急に調査し、修復・保存へと乗り出していく必要がある。

そこで、金沢大学はフィレンツェ、サンタ・クローチェ教会壁画の修復プロジェクトの成功実績に基づき、再び国立フィレンツェ修復研究所と連携協力し、非接触・非破壊での壁画調査と文化財保存の観点からのデジタル・アーカイブの形成を目的とした南イタリア中世洞窟壁画群診断調査プロジェクトを立ち上げた。その第一回の本格的な調査が2011年9月に行われ、その時の調査地に本論文で取り上げたサン・ヴィート・ヴェッキオ教会とエットーレ・ポマリチ・サントマーゼ財団所有博物館があった。(Fig. 1)

サン・ヴィート・ヴェッキオ教会は南イタリアのプーリア州グラヴィーナ・イン・プーリアの農園の中にある石切り場に建っている。凝灰岩台地を削り抜いて建設された半円筒型ヴォールト天井の単廊式教会であり、奥行き約9m、幅約4.5m、天井までの高さは約3.5mである。凝灰岩を加工したファサードから入った正面に後陣があり、高さは約3.3m、幅は約3mである。また、後陣に沿って2段の台座が設けられている。

この教会の特徴的な点は、堂内の壁画が全て剥がされ、同じグラヴィーナ・イン・プーリアにある博物館内の展示室に移動されていることである。(Fig. 2) 1956年に洞窟教会を国が買い取り、1957年にローマ中央修復研究所が壁画をマッセッロ法で剥がした。剥がした壁画は裏面に補修処理を行った後、世界各地を巡回して、最終的には1967年に博物館内にもともと壁画が描かれていた教会堂内と同じ建築空間を再現し、そこに再び壁画を組み上げて復元したのである。



Fig. 1 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会外観



Fig. 2 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会に描かれた壁画

## 2. 堂内に描かれていた壁画について

サン・ヴィート・ヴェッキオ教会堂内には、後陣と左右の側壁の三面に壁画が描かれている。左側壁には向かって左側から「聖ペトロ」、「聖ラザロ」、「聖ヤコブ(大ヤコブ)」、「聖バシリウス」が直立し、横一列に並んで描かれている。その右隣には福音書に典拠を持つ「聖墳墓を訪れる3人のマリア」が描かれている。後陣では、中央に玉座に座った巨大な「パントクラトールのキリス

ト」がマンドルラに包まれており、4人の天使たちがマンドルラと玉座を支えている。右側壁には向かって右側から「アレクサンドリアの聖女カタリナ」、「幼児イエスを抱く聖母マリア」、「聖バルトロマイ」、「バーリの聖ニコラウス」、「聖女マルガリタ」が直立して並んで描かれており、その左隣には劣化が激しく、判別が困難であるが、「聖コスマス」と「聖クリュソストモス」が描かれており、さらにその隣には制作年代の大きく異なる「聖マルティヌス」が描かれている。

壁画の制作年代は12世紀末～13世紀初であり、「聖マルティヌス」のみ15世紀～16世紀に制作されている。壁画が制作された12世紀末～13世紀初の南イタリアはビザンティン帝国の支配からノルマン朝シチリア王国の支配下にあった。その他にベネディクト会のモンテ・カシーノ修道院が1071年に、サンタンジェロ・イン・フォルミス教会が1087年には完成していた。それらのことを総合すると、南イタリアにもともとあったビザンティン美術の土台の上に周囲の教会、修道院からのロマネスク美術の影響が重なっており、南イタリアは東からのビザンティン美術の流れと、ロマネスク美術が混交している場所であると言える。

サン・ヴィート・ヴェッキオ教会に描かれた壁画をみても、特徴的な顔の描写や平面的な立ち方など、ビザンティン美術の影響が非常に強く感じられる。だが、細部に注目してみると、マンドルラに包まれ、玉座に座ったキリストや、キリストの持つ聖書に書かれたラテン語の文字など、ロマネスク美術の影響もみられる。その他には、壁画の細部をよく見ると、完全な統一感はなく、何人かの画家によって分担されたのではないかと考えられる点が見られる。左側壁の装飾が途中で切れてしまっている点や、右側壁の「聖コスマス」と「聖クリュソストモス」の円光が他の聖人たちと異なる点が挙げられる。サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画には様式や文化の混交がみられるだけでなく、数人の、それも出身地や活動地域の異なる画家たちが共同制作で描いたと思われるような特徴がみられるのである。

## 3. 壁画の図像プログラムと建築空間の関係

サン・ヴィート・ヴェッキオ教会に描かれた『パントクラトール』の特異性について考察するに当たり、比較対象として他の教会における後陣壁画の「パントクラトール」の描き方について考察する。まずはビザンティンやロマネスク様式の大規模な教会と、南イタリアにみられるような洞窟教会の二つの場合について一般的な描かれ方を考えていく。ビザンティン様式の大規模教会の具体例としては、イタリアのシチリア島にあるチェファルー大聖堂、モンレアーレ大聖堂、パラティーナ礼拝堂を、ロマネスク様式の教会の例として、カンパニア州カゼルタのサンタンジェロ・イン・フォルミス教会を取り上げた。また、洞窟教会の具体例としては、2011年の調査地であったパードゥレ・エテルノ教会と、予備調査を行ったサンヴィート・ディ・ノルマンニのサン・ジョヴァンニ教会を取り上げた。これらの教会は後陣に「パントクラトール」描かれており、さらにビザンティン美術とロマネスク美術それぞれの影響を受けた壁画が描かれているといった観点から選んだものである。

まず、大規模教会の場合について考えてみると、一番の特徴として挙げられるのが、壁画を描くための壁面の多さである。高い天井をしており、柱で支えると言うよりも、壁で支える建築構造

をしているため、開口部は狭くなり、したがって壁画を描くのに十分な面積を確保する事が可能なのである。大規模教会では後陣はいくつかの段に分けて諸聖人や天使、そしてキリストを描いている。また、後陣でなく側壁の場合であっても同様に1段ないし2段に分けて壁画を描いている。(Fig. 3) 広い面積を確保できたからと言って、巨大なキリストを描いたりするのではなく、水平に線で切って段に分け、そこに壁画を描いていく。さらには描かれる場所も重要であり、上段にいくほど重要な図像となる。「パントクラトール」が後陣に描かれる場合は最上部に描かれ、後陣を段に分けるために一段の高さはなくなってしまうために、胸像や半身像で描かれる場合が多い。最上部に描かれることで、教会を訪れた人々にとって、常に天上から人々を見下ろしている威厳に満ちたキリストを表現する事が出来るのである。

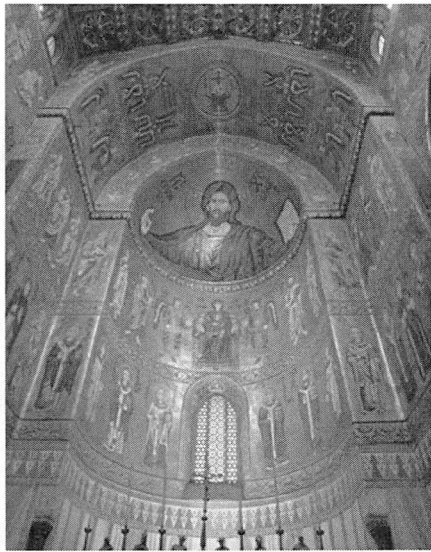


Fig. 3 モンレアーレ大聖堂後陣壁画



Fig. 4 サン・ジョヴァンニ教会堂内

次に、洞窟教会の場合を考えると、大規模な教会のように高い天井を持たない。つまり、後陣を段に分けて描くことが出来ないのである。そこで、直立した聖人が単独像または横に並んだ群像として描かれている。(Fig. 4) また、後陣には単独で「パントクラトール」を描くだけでなく、キリストを挟むように両脇に「聖母マリア」や「洗礼者聖ヨハネ」を描き、デイシスと言う代顔を意味する図像を描く場合もある。天井が低く、上から見下ろすよう

なキリストの威厳を表現するのが難しいので、全能の支配者であり、審判者であるキリストへ人類の罪の赦しを祈願する「聖母マリア」と「洗礼者聖ヨハネ」を描いたのである。

#### 4. サン・ヴィート・ヴェッキオ教会に描かれた『パントクラトール』の特異性

要旨でも述べたように、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会に描かれた『パントクラトール』からは、一般的・伝統的なビザンティン美術における図像表現としての「パントクラトール」の典型とは少し異なった印象を受けた。つまり、神の威厳や恐ろしさと言うよりも、むしろ対極にある親しみやすさを感じたのである。では、その異なった印象、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の特異性はいったい何に由来するものなのであろうか。(Fig. 5)

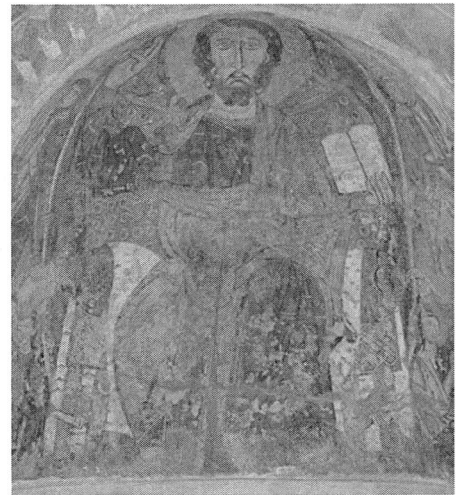


Fig. 5 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会後陣部分

その一つとして描かれた「パントクラトール」のロケーションの違いが挙げられる。サン・ヴィート・ヴェッキオ教会は洞窟教会であり、一般的な地上に建設されている教会とは大きく異なるものである。一般的な「パントクラトール」とは、つまりビザンティン美術の図像学的伝統によるものであり、それは地上に建設された高層建築の後陣上部やドームに描かれるものである。「パントクラトール」とは全能者や全世界を統べる者、全能の支配者と言った意味で、高層建築の、さらにその上部に描くことがふさわしい。例えば、イタリアのシチリア島の大規模建築に「パントクラトール」が描かれている場合について考えてみる。チェファルー大聖堂、モンレアーレ大聖堂、パレルモのパラティーナ礼拝堂の後陣壁画に着目してみると、いずれの場合も高い後陣壁面を2~4段に分割し、聖母や諸聖人、天使を下の層に描き、その最上部に「パントクラトール」を描いているのである。

だが、洞窟教会の低い天井の後陣に描いたのでは、そのようなイメージを持たせることは困難である。そのため、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の場合、「パントクラトール」が描かれているロケーションが一般的ではないのである。洞窟教会のような低いところに描かれた場合と高層建築の上部に描かれた場合では、信者など見る者の仰角に大きな違いが出てくる。高い位置に描かれた「パントクラトール」を仰ぎ見ると同時にキリストに見下ろされる場合と、低い位置に描かれた「パントクラトール」をほぼ

変わらぬ目線で見るとでは受け手の印象が大きく変わってくる。つまり、描かれる位置によって図像に対するイメージが大きく異なってくるのであり、高層建築の上部に描かれる「パントクラトール」は洞窟教会に描かれるには適さないのである。と言うことは、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の後陣に壁画を描く際に単純にビザンティン美術における伝統的な「パントクラトール」を参考にして描いたとは考えにくい。そこで、別のモデルを探すと、ロマネスクの伝統が浮上してくる。サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画が描かれた12世紀から13世紀はグラヴィーナをはじめとする南イタリアにおいてベネディクト会によるロマネスクの影響が広まっていたことは間違いない。当時であればベネディクト会のモンテ・カシーノ修道院が強い影響力を持っていたが、戦争の惨禍によって修道院に描かれていた壁画は失われてしまった。そこで、現在では同じベネディクト会のサンタンジェロ・イン・フォルミス教会に描かれた壁画から、南イタリアにおけるロマネスクの影響を考えていきたい。サンタンジェロ・イン・フォルミス教会の後陣壁画に注目すると、先程のシチリア島にある大規模建築物の場合と同じように広い後陣面積を2層に分けて、下層に天使を、上層に「パントクラトール」とそれを囲む4人の福音書記者を象徴する有翼の動物が描かれている。しかし、決定的に違うのは、シチリア島の「パントクラトール」が胸像であったのに対して、サンタンジェロ・イン・フォルミス教会の場合は玉座に座った座像なのである。(Fig. 6)ここに描かれている座像としての「パントクラトール」はビザンティン美術では描かれる事が無く、ロマネスクの影響を受けて生まれた図像のタイプである。すなわちベネディクト会の影響力のもと、ロマネスク的な座像としての「パントクラトールのキリスト」が南イタリアにも広まっていた事実を考えると、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画を描いた時にも参考している可能性は高いと思われる。洞窟教会内の空間を考えてみると、天井は低く、横幅も狭い。したがってそこは、信者が自分たちと同じような目線で聖人たちとふれ合う空間であると言っても過言ではない。天上から見下ろす威厳に満ちた半身像ないしは胸像のキリストを描くよりも、地上レベルでの座像としてのキリストが描かれる方が洞窟教会にとってはふさわしい。そういった空間の中で、高い位置に描かれてこそ表現できる神の威厳をもった全能のキリストが、玉座に座った形で、

地上的・人間的になってくるのは自然のように思われる。

そして、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の場合さらに特異な理由が挙げられる。それは、壁面全体の図像プログラムとの関係である。左右の側壁には等身大の聖人が並び、左側壁最も後陣に近いところには埋葬された「キリストの復活」が描かれている。しかし、「パントクラトール」は本来キリストの生涯とは全く別のものであり、全能者としての威厳を示したものであり、ビザンティン帝国において皇帝の威厳と一体化し、帝国の中では天上の皇帝と地上の皇帝と一致して、威厳や権力を象徴すべく、一致していったものなのである。人の子として生まれ、磔にされて、さらに復活するという地上を統率するものという考え方はビザンティン世界では出てこなかった。サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の場合、左側壁の「キリストの復活」場面から連続して後陣の「パントクラトール」を描くことで、本来単独像である「パントクラトール」に、人間として実際に生きたキリストの人生の一場面を結びつけた。人間味や親しみやすさが図像プログラムとして強調

されたのである。サン・ヴィート・ヴェッキオ教会とほぼ同じ地域にある洞窟教会のパドゥレ・エテルノ教会とサン・ジョヴァンニ教会の場合はどうであろうか。どちらも天井は低く、横幅はせまいという一般的な洞窟教会の建築空間をしている。そこで地上に建設された教会の場合とは異なり、層に分けて壁画を描くことはなく、ここでも等身大の聖人たちが並んで描かれている。後陣には中央の「パントクラトールのキリスト」をはさんで左右に「聖母マリア」と「洗礼者聖ヨハネ」を並べる「デイシス」が描かれており、神の威厳を示すというよりも、全能者キリストへの人々の代願者である聖母マリアや洗礼者聖ヨハネと一緒に描くことで地上的な表現が意図されているのではないかと思われる。しかし、後陣の「デイシス」は単独のものであり、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会のように、側壁からの連続な図像プログラムとしては考えにくい。

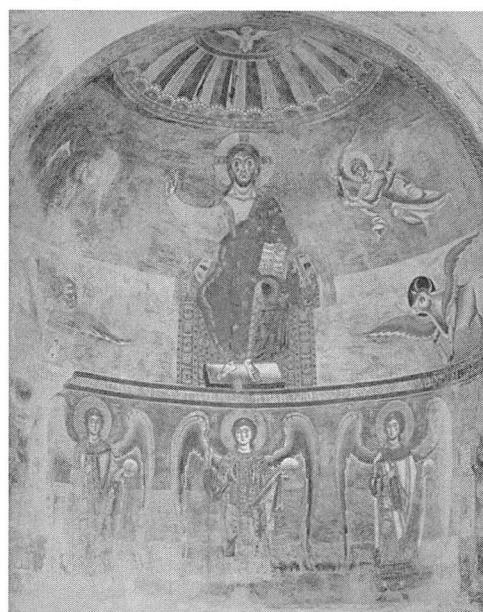


Fig. 6 サンタンジェロ・イン・フォルミス教会後陣壁画

ところで、サンタンジェロ・イン・フォルミス教会の場合、玉座に座った「パントクラトール」の周りに4人の福音書記者を象徴する有翼の動物が描かれている。これは現実の空間と言うよりも、幻想上の有翼の動物を描くことで、異次元の空間として表現されている。この点でも、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の場合は、人間的な4人の天使がマンドラを支える事で、より地上的な存在感や人間味を強調する効果があると考えられる。いずれにしても、これらすべては洞窟教会の狭い空間に描かれたということによるのではないだろうか。異次元の空間の中に威厳に満ちた全能者を表現するよりも、人間的につながる空間を現出させようとしたに違いない。

以上見てきたように、私が最初にサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の『パントクラトール』を見た時に感じた一般的な「パントクラトール」とは異なる印象は、建築空間と言う描画空間のロケーションの特異性とロマネスク美術の影響、そして単独像ではなく左側壁との図像プログラムの全てが総合されて、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の人間味が前面に強調された『パントクラトール』が誕生したのだと結論する。